# 日本再興

でんでん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日本再興

【Ｎコード】
Ｎ９８３４Ｘ

【作者名】
でんでん

【あらすじ】
沖縄への海軍総特攻と、日本が史実よりも早く降伏し、ある程度の軍隊保有を認められた日本の戦後の話。
※この小説は個人的妄想とちっぽけな知識で繰り広げられています。
不定期連載です。
またこの物語は作者が勝手にいろいろと変更するかもしれません。
ですが物語のあらすじや全体的な流れは変更しないと思います。

# プロローグ

１９４５年7月１２日、大日本帝國はアメリカ、イギリス、オランダなどの連合国に無条件降伏した。
独逸の無条件降伏と、４月の沖縄死守のための海軍総特攻、沖縄の陥落により
日本が闘う力はもはや残されていなかった。
軍部、大本営は「徹底抗戦、一億総玉砕あるのみ」と断固反対したが、天皇陛下や当時の首相であった鈴木貫太郎、４月の沖縄特攻でほとんどの主力艦を失い、そこまでした援護した沖縄も7月2日に陥落、燃料、資源は枯渇し、国力や国民の生活はほぼ限界だろうと考えていた海軍に押し切られた。
この話は、日本を守るため、そして再び日本が立ち上がるために命を尽くした数え切れないほどの者たちの話である。

## １９４５．３．３０

１９４５年３月３０日　戦艦大和会議室

「あなたは７０００人もの部下に無駄死にしろと言うのですか」

伊藤整一海軍中将はこう言い放った。

「何も第二艦隊だけでとは言っていません。帝國の持てる全戦力を投入します。」

草鹿参謀長はこう言った。

「具体的には？」

「戦艦は帝國のもてる全てを投入し、空母は天城、葛城、隼鷹、巡洋艦は羽黒、高雄、青葉、利根、足柄、矢矧、酒匂、その他駆逐艦は２２艦を投入し、潜水艦も１３艦を投入し、第３２軍による総攻撃も行います。」

「燃料は足りるのですか？もしこの作戦が万が一成功したとしてもこれからの防空任務が疎かになってしまっては意味がありません。そして空母を出したとしてもマリアナのように落とされるのがオチです。」

「では、誰が沖縄を救うのですか？あそこには沢山の兵士、そして民間人がいます。それを見捨ててどうしろと？」

「だからそれでも私たちの部下を犬死することは、豊田司令長官の

命令でも許しません。」

会議室は静寂に包まれた。

三上中佐が口を開く。

「及川古志郎軍令部総長がこの作戦を天皇に上奏したとき、「航空部隊丈の総攻撃なるや」との御下問があり、陛下から「飛行機だけか？海軍にはもう船はないのか？沖縄は救えないのか？」と・・・要するに、一億総特攻のさきがけになっていただきたい、これが本作戦の眼目であります。」

「分かった。やってみよう。だが、どうやっても成功の望みがないとき、私の独断で作戦を中止し残存艦船を撤退させます。それで良いですか？」

「はい。それで良いでしょう。いざとなればこの責任は私が負います。」

草鹿参謀長が答える。

これが帝國海軍最後の水上作戦、天一号作戦の始まりだった。

## １９４５．３．３０（後書き）

感想、ご意見などあればお願いします。
文才がないような・・・（じゃあ何で書くんだ）

## 1945．4．1

１９４５年４月１日　呉　戦艦伊勢艦橋

「牟田口艦長。決行日の７日までに戦艦の修理は間に合うでしょうか？」

「伊藤長官、申し訳ありませんが間に合わないと思います。戦艦の他に、一部の巡洋艦の修理も行わなければいけませんしね・・・」

「この作戦、勝てるでしょうか？」
牟田口艦長が問う。

「正直に言うと、この作戦に勝つのは到底不可能でしょう。よほどの偶然が起きない限りは・・・数、錬度でも負ける我軍は、どこで勝てるのでしょうね・・・」

その時、通信兵が突然入ってきた。
「伊藤長官！」

「何かね？」

「ある程度の敵戦力が分かりました。空母、戦艦が１５、その他補助艦艇が３５前後と見られます。」

「アメさんも本気だな・・・第二艦隊だけで行くのは無謀だったな・・・」

「やはり出来るだけ多くの艦艇で行ったほうがよろしいみたいです

ね・・・」

「今度はレイテのように撤退は許されない。貴重な巡洋艦や駆逐艦を囮に差し向けるのだからな・・・」

天一号水上特攻作戦要項
第二海上特別攻撃隊、第四海上特別攻撃隊、第五海上特別攻撃隊は
４月８日に沖縄に壮烈無比な突入を行い、敵機動艦隊を撃滅せよ
これは帝國陸海軍の総力を持って行われる作戦である
皇国の興廃この一戦にあり各員一層奮励努力せよ

同日　呉　戦艦大和　会議室

「痛つつつつ・・・まったくアメ公もやってくれたものだね・・・・・」

そう言う黒髪ポニーテールの女子。
もちろん海軍には女性乗組員などいない。喋るのは、戦艦伊勢の艦魂伊勢である。

「そうだね姉さん。この空襲で沈没艦も出てしまったし、大淀ちゃんとか大変そうよ？」
と答えるのは黒髪ポニーテール、伊勢に瓜二つの戦艦日向の艦魂日向。

「って集まった目的はそんな雑談会じゃないでしょ！」

「でも呉に居た艦はほとんど空襲を受けてるし・・・大和ちゃんはどうだった？」
全員無視。さらに騒がしくなる会議室。

「被害は軽微でしたが・・・さっきから榛名さんの意見が無視され

てるような・・・」
と話す長い黒髪をした麗人、戦艦大和の艦魂大和が突っ込む。
もちろんおしゃべりは止まらない。
元々雑談会ではなく天一号作戦の会議として呉に居た艦魂をほとんど召集して行われた会議だったが、伊勢姉妹のお喋りによって完全に話題は3月の呉軍港空襲に。
騒がしくなる会議室に、すすり泣く声が・・
赤髪のツインテールをした２０歳くらい女性、戦艦榛名の艦魂榛名が泣いていた。
「なんでみんな無視するのよ・・・作者だって気遣ってくれないし・・・もう嫌だ・・・グスン・・・大和ぉ・・・」
といって大和に抱きついてしまった。
一同驚く。そして静まり返る。
当然、一番驚いて赤面しきっていたのはやはり大和だった・・・

## １９４５．４．１（後書き）

作者＜艦魂については出すか迷っていましたが、結局出すことにしました。とりあえずこの話は一部人物と帝國、アメ公の艦魂くらいしか出てきませんし、ある程度進んでいくと新しい登場人物は出なくなると思います。問題は「短くてもいいからほぼ毎日連載する」か、「長いけど連載間隔が長い」かのどっちかになると思いますけど・・・自分ではこれが限界ですしね・・・

艦魂連合＜・・・

作者＜あの・・・なんか御用でも・・・

艦魂連合＜ごちゃごちゃ喋るな！要点だけ言え！

作者＜すいません・・・

艦魂連合＜毎回本編が短いんだよ！（特に一話）

作者＜すいません・・・

艦魂連合＜というかこんなお前みたいな馬鹿作者の書いた現実逃避小説なんて見る人いないんだよ！

作者＜もういい・・・普通そこまで言うかよ・・・こいつら沖縄で全員沈める・・・

艦魂連合＜何か言ったか？罰として戦艦群の主砲斉射！

ズトーン！！

艦魂連合＜いや～いい音だね～

大和＜暴走しずぎましたが、ご意見ご感想お待ちしています。

## 1945．4．1　？

１９４５年４月１日　呉　戦艦大和会議室内

次の作戦が特攻作戦だとは薄々分かっていた。
レイテで瑞鶴、千歳、千代田、瑞鳳を失い、戦艦も扶桑、山城、金剛、そして不沈戦艦武蔵を失った。他にも鳥海、摩耶・・・
みんな自分の大切な仲間だった。もう日本には闘う力が残されていないことも気付いていた。
だが、それでも米英に立ち向かわなければならないことを、彼は知っていた。

艦魂たちの会議は、平行線を辿っていた。この作戦が本当に正しいのか、私たちはここで死ぬことに意味があるのか、こんな作戦ただの無駄死にだと、そして、もしこの作戦が成功しても米英は日本を諦めるのか、と。
いつも温厚でふざけてばかりでいた伊勢姉妹までも、この作戦は正しいのか、そしてこんな作戦なんてただの無駄死だ、と・・・

「野方大尉。答えてください。なにぼんやりと考え事してるんですか？」
突然、声をかけられた。その声は、大和のものだった。

「ああ、何について答えればいい？すっかり考え事をしていてな・・・」

「まったく、野方さんはいつもそう・・・この作戦についてどう思いますか？」

さっきから静まり返った会議室で榛名が言う。その話をしていたのか・・・
彼は野上　修也。戦艦大和の航海長だ。階級は大尉。つい最近大和の航海長に着任したばかりだった。そして、彼には艦魂が見えた。
そして野上が重い口を開く。

「この作戦、俺はやるしかないと思う。俺たちが日本を守らずして、誰が日本を守る？
こうやって会議している間にも、米軍が上陸し、陸さんが苦しめられ、沖縄は追い詰められている。沖縄が落ちたら、次は本土だ。俺たちは、闘わずして死ぬか、闘って死ぬか。
それしか選択肢が残されていないんだよ。」
静まり返っていた会議室が騒ぎ出した。

「ですが、本土防空や輸送まで完全に放棄して、ただでさえ少ない燃料をこんな作戦につぎ込むのなら、他に使い道があるんじゃないのかと私は思います。
それにこの作戦は、私たちに死にに行けと言っているのと同じようなことです！
少ない戦力で量、錬度に勝る米英に立ち向かうなど・・・
沖縄は諦め、本土決戦に持ち込むのが良いと私は考えます。」

巡洋艦利根の艦魂、利根が言う。
「そうだ！」「こんなの無駄死だ！」という声が聞こえる。

そして野上が反論する。

「この作戦を伊藤中将が承諾したとき、三上中佐がなんと言ったか知っているか？
陛下から「飛行機だけか？海軍にはもう船はないのか？沖縄は救え

ないのか？」と聞かれたそうだ・・・要するに、一億総特攻の先駆けになってもらう。これが本作戦の眼目だとな。
それに、かつて俺の一番尊敬する人がこう言っていたよ。
『俺たちが、軍が不甲斐無いばかりに、力がないばかりに、俺たちが守らなければいけない国民が、傷ついて死んでいくんだよ。俺たちのせいで、贅沢も娯楽もできず、我慢を強いられているのにだよ。犠牲になるのは、何の罪もない国民なんだ・・・』とな・・・
ここで何も出来なければ、また罪のない国民が犠牲になる！俺の母さんだって東京大空襲で死んだ！ここで何も出来なければ・・・・」

会議室は騒がしくなっていく。野上が大和に聞いた。

「大和、作戦決行はいつだ？」
「あっ、はい・・・出港が４月７日、沖縄に突入するのが４月８日です・・・」
「そうか・・・じゃあ、言っておく・・・別れは一応済ませておけ・・・もし沖縄で死んでも、後悔がない様にな・・・じゃあ、出港時に、各自自分の覚悟と決意を持って来るように。話は以上だ。これで大丈夫か？」

「では少し艦橋に行かなければいけないからな・・・それじゃあ。」といって野上は会議室を出た。

「ねえ日向・・・私は・・・私は武蔵や、扶桑姉さんや、愛宕の仇を取る。だから、絶対に・・・勝ってみせる！」
伊勢が言う。
「姉さん・・・アメ公に思い知らせてやりましょうか。日本は負けないって。日本は勝ってみせるって。」
そう日向が答えた。

天一号作戦・・・第二次世界大戦最後の海戦。
だがそれは、日本にとって帰還することを考えない、悲惨な特攻作戦だった。
それでも艦魂たち、乗組員たちは、それぞれの大切なものを守るために立ち向かう。

## １９４５．４．１　？（後書き）

作者＜野上さん出てきましたよ。
野上＜どうも。
作者＜たしか史実でも大和は出撃に半月前に航海長が変わっているんですよねー。
野上＜これも史実に合わせたのですか？（史実では茂木航海長、前任は戦艦榛名）
作者＜そうですね。ちなみに野上さんの前歴は長門の航海士です。長門とも面識があることになります。
野上＜ところで呉などの機雷封鎖は行われていないのですね。
作者＜やられたら話しになりませんよ・・・燃料とかの事情とかもそこらへんご都合主義になってます・・・
あと戦闘パートはかなり先ですね・・・少しずつ書いていますし、アメリカ側も書かなければいけませんしね。
艦魂連合＜早く終わらせろやボケ
長門＜私の出番はマダ？もう本当待ちきれないから主砲打つわ
作者＜やめてくださ・・
ズドーン！！
野上＜ご意見ご感想お待ちしております・・・・

## １９４５．４．１　？

１９４５年４月１日　横須賀　戦艦長門甲板上

「特攻・・・か」

甲板の上には三人の少女がいた。
茶色の短い髪をくしゃくしゃに掻き分けてそう呟く１６．１７歳くらいの少女。
彼女が戦艦長門の艦魂、長門だった。

「長門さんは・・・死ぬのが・・・怖いですか？」
そういうのは白い髪をした病院船氷川丸の艦魂、氷川だった。

「ううん・・・怖くない・・・私はみんなを守ることが出来なかった・・・陸奥も、武蔵も、金剛さんも・・・だから今度こそ・・・私が、みんなを守りたいんだ・・・だから、そのために死ぬのなら怖くない・・・」
長門が言う。
だけれども、長門は死ぬのが怖かった。みんな居なくなってしまった。翔鶴も、加賀も、陸奥も・・・そして、いつか自分がこうなってしまうということも・・・
だけど、弱音を吐きたくない。私は立ち向かわなければいけない。たとえ一人になっても・・・でも、やっぱり覚悟しきれて居なかった。

「うー、長門さん嘘ついてます・・・誰だって死ぬのは怖いですよ？それに、辛いときは辛いって言っていいんですよ？自分で溜め込んでもいいこと無いですよ？」

と水色の髪をした輸送艦宗谷の艦魂、宗谷が言う。

「嘘なんて・・・嘘なんてついてない！」

長門、見透かされ動揺する。

「私だって死にたくないです。死ぬのが怖いです。でも、最初から死ぬと決めつけていたら・・・」

氷川が話す。

「・・・もういい！」

怒る長門。長門はどこかに行ってしまった。

同日　横須賀　戦艦長門艦内

長門は士官室で泣いていた。ここなら誰にも、いや一人にしか見られない。

また素直になれなかった。また嘘をついてしまった。また誰も守れなかった。そう考えると自分が嫌になってくる。

私は連合艦隊旗艦だった。皆の憧れだった。

でも本当は辛かった。いつも自分よりも規則を優先して、自分で自分を追い詰めて、自分を偽って・・・

もっと楽しく生きたかった。いつもお気楽な伊勢姉さんたちのように。鬼みたいに厳しいくせに面白かった金剛さんのように。

悲しいとき、自分はいつも自分にも他人にも嘘をついてきた。

山本長官が撃墜死されてしまったときに、「国のためなら死ねる」

「死ぬのは怖くない」なんて言って・・・

でも、やっぱり死にたくない。生きたい。私は私のために生きたい。

心の中ではそう思ってた。でも、そう言えなかった。

私は卑怯者だ。私は臆病者だ。そして、私は誰も救えない。無力だ。

ガチャ

「！」

「おいおい・・・」

入ってきた人物は、戦艦長門の航海士大野だった。

「なんかすすり泣く声がすると思ったら、幽霊じゃなくお前か」

大野が言う。彼は艦魂が見えた。

「・・・悪いの？」

長門は泣きながら言う。

「お前が泣いたのを見たのは金剛が沈(し)んだとき以来だったな・・・

それで、何か悪いことでもあったのか？」

「・・・・・・」

黙る長門。

「聞かないでおく。そうだ、天一号作戦の出港は4月4日。それまでに、後悔しないように別れを済ませておけ。」

大野はこんな事言いたくないというような顔で言った。

「・・・大野さんは、死ぬのが、怖いですか？」

長門が尋ねる。

「天一号作戦の事か？怖いけれど、どうかしたのか？それに、俺は武蔵や鳥海の仇を取りたい。それに、乗組員たちも同じような考え

だろうな・・・だから、お前がクヨクヨしてどうするんだ？」
「けれど！こんな死んで来いと言っているような作戦を・・・」
長門が反論する。
「何にもしないよりはマシだよ。ずっと止まったままで身動きも出来ずアメ公に沈められる位ならな。それに、生きて帰ってくれれば、問題無い。」
大野が言う。
「それに、さっき宗谷や氷川が言っていたぞ？自分に正直にならなければ、何も出来ないよって。」
「！！」
長門が反応する。
「今のうちに言っておかないと、手遅れにな・・・」
といっているうちに、長門はどこかに行ってしまった。
同日　横須賀　戦艦長門
大野の言いたいことは分かっていた。このままだと、手遅れになる。それだけは嫌だった。あの二人に謝りたい。長門は甲板上に出る。甲板上には二人の少女が居た。
「宗谷！氷川！」
長門が呼ぶと、その二人は振り返った。
「長門・・・さん？」
氷川が返事をする。

「ごめん・・・私が・・・二人を・・・傷つけた・・・また・・・嘘ついた・・・」
長門、泣きながら謝る。

「いいんです。そんな小さいことで傷つきはしませんし、気にもしませんからいいですよ。
それに、長門さんは一人じゃないんです。もっと皆に頼っていいんです。大和さんや、高雄さんとか雪風さんや、それに私たちだって居るんです。」
宗谷が言う。

「・・・それに、私たちは長門さんたちに沢山助けられてきました。・・・だから、今度は私たちが長門さんたちを助ける番です。」
氷川が言う。

「今度こそ沖縄は・・・日本は・・・あなた達は、私が守ってみせる。だから、絶対に死なない。絶対に帰ってきてみせる。」
長門が言う。
そのあと小さな声で氷川に言った。
「じゃあ帰ってきたらいろいろ甘えちゃおうかなぁ？」

「クスクス・・・」
氷川は笑って答えた。

「じゃあ、約束ですよ？絶対にまた生きて会うんですよ？死んだら許しません！地獄の底まで追いかけますから！」
宗谷が答えた。

長門の目は、前のように迷っていた目の色ではなかった。もうその

目は、決意した一人の勇士の目をしていた。

１９４５年４月４日　横須賀

見送りは、たった二人の艦魂だけ。
でも、長門は嬉しかった。こんな私でも、共に喜び、悲しんでくれる仲間が居ることが。

１９４５年４月４日午前３時３０分。長門は、少しの海防艦を伴い、呉に向けて静かに横須賀を出港した。
帝國海軍最後の水上作戦　天一号作戦　の始まりだった。

## １９４５．４．１　？（後書き）

作者＜休日は素晴らしいぜヒャッハー！！
大野＜どうやらこいつ土曜日の文化祭の振り替え休日を悪用してダメダメライフを送っていたか・・・
作者＜え？ダメですか？
艦魂連合＋野上＋大野＜ダメだ
氷川＜・・・どうやら拝見したところ、本文がだんだん長くなっていますね・・・それにフラグがちゃんと立っているし・・・
作者＜何のことですかね・・・本文の件についてはね・・・今回は２０００字くらいになっていて、内容をうまい所で切らないと話が長引いて投稿に遅れが出るかもしれませんしね・・・とりあえず１５００くらいが目標です。あと章とかいろいろといじっています。
長門＜・・・そろそろアメリカ側にも動きがありそうですね・・・
作者＜ここ最近飽きずに睡眠せずに更新していたので１、２日くらい休みます。それに確かにアメリカ側は動き・・・
ズトーン！
伊勢、日向＜ネタバレ禁止。
宗谷＜ご意見、ご感想をお待ちしております。

## １９４５．４．４

１９４５年４月４日午前８時　沖縄近海　第５８任務部隊旗艦　戦艦ニューメキシコＣＩＣ

「長門が出撃？」

第５艦隊司令、レイモンド・Ａ・スプルーアンス大将は耳を疑った。

「はい。先ほど横須賀近海を監視していた潜水艦により発見され、６艦の海防艦と共に１１ノットで呉に向かっています。もしかしたら・・・」

士官が答える。

「沖縄への援護か・・・」

「潜水艦に尾行を命令せよ。」

「ですが、司令。先ほどからその潜水艦とは通信が途絶えております。」

「各艦に打電せよ。呉に向かう戦艦「長門」を発見。潜水艦からの通信は途絶えており、近いうちに沖縄に日本艦隊が来襲すると思われる。」

「はっ！」

同日午前九時半　日本近海　長門艦橋

長門は鵜来、宇久、粟国、二十二号海防艦、四十一号海防艦、四十九号海防艦と共に呉に向かっていた。

「鵜来から入電。潜水艦ノ撃沈ヲ確認セリ。とのことです。」
通信員が報告する。艦橋は安堵に包まれた。だが艦長は安堵しなかった。

「そうか・・・それでは我々はアメリカにもう知られているということか。
ならば偽装進路の必要は無いな。もう真っ直ぐでいいぞ。」
艦橋に緊張が走る。

「通信兵。護衛艦に打電。我米軍ニ発見サレタ可能性大。コレヨリ我々ハ最大速度デ呉ニ直行スル。」
「はっ！」

「危機は脱したみたいだが・・・いつ機動艦隊や潜水艦に攻撃されてもおかしくないな。」
大野が長門に話す。

「うん・・・呉に無事に辿り着けるのかな・・・」
長門が不安そうに言う。

長門以下7艦の艦隊は、丙型海防艦の最高速度、１６．５ノットで呉に向かう。

同日9時半　沖縄近海　米海軍第５８任務部隊第４任務群　空母インドレピッド

次から次に突入する特攻機。

悪魔のような弾幕で撃墜されるものもいれば、戦闘機に落とされるものもいる。敵艦に突入するものもいる。

見張り員が叫ぶ。
「敵機突入！」

悲鳴のようなその叫び。敵は私にも、皆にもぐんぐん近づいてくる。
一機ではない。何機も。
「嫌アアアア！」

イントレピッドの艦魂イントレビットはそう叫んだ。頼む、来ないでくれ。
だがそれが叶うことは無かった。
二機は飛行甲板に。一機は艦橋に、一機は落ちたと思いきや水中で爆せた。
次の瞬間、イントレピッドの姿は何処にも無かった。

この時の特攻機による損害は、空母イントレビット、軽空母サン・ジャシント、軽空母バターン、軽巡洋艦マイアミ、他駆逐艦１０艦が沈没。
その他の艦も、特攻機により少なくない傷を負っていた。

「イントレビットが・・・死んだ？」
桃色の髪をしたバンカー・ヒルの艦魂バンカー・ヒルが耳を疑う。
「全く・・・何でジャップは正々堂々と勝負をしないのかしらねぇ・・・本当に卑怯者。」
ベロー・ウッドの艦魂、ベロー・ウッドはそういう。

自分たちからしてみれば、お前たち航空母艦だって十分卑怯者だ。
そう考えつつ、白い髪をした艦魂、ミズーリが言う。

「やらないのでは無く・・・できないのでは？日本は先日のマリアナ、キング？作戦で多大な打撃を受けました。残っている空母で戦力になりそうな物もたった3艦。戦艦だって我々と大きな差があります。質、量で勝る我々には、正攻法では勝ち目が無いこと位知っているでしょう。」

「カミカゼに頼らないと勝てない・・・ジャップもそこまで落ちぶれたか・・・それでも・・・やつらは狂っている・・・」
オレンジの長い髪をしたヨークタウンの艦魂、ヨークタウンが言う。
「この借りは・・・何倍にもして返してやる！腐りきったジャップに鉄槌を下すぞ！」
とヨークタウンとよく似た艦魂、エンタープライズが言う。
空母たちは掛け声を上げる。もう皆勝った気でいた。

だが、その話を聞いていたスプルーアンスは違った。
カミカゼの突入により乗組員の士気は低下、特攻機により損害を受けた艦も少なくは無い。
この戦い・・・何か嫌な予感がした。

## １９４５．４．４（後書き）

作者＜スプルーアンスの他にもこの戦いを心配している者もいます。
現実特攻では精神的ダメージも大きかったですし。
野上＜作者さん・・・何か調子に乗って変な物をうｐしていますね・・・
作者＜それについては、気が向いたら更新といういい加減なものです。
どこかで見たことのあるような異世界ものですよ。
野上＜次の予定は・・・特攻前夜になっていますね・・・
作者＜はい。ついに出撃です。今回と同じく両視点で描かれると思います。あと一日２話書いたので明日は更新しないそうです。
作者＜（良かった・・・今回は粉々にならずに済んだ・・・）
ではご意見・・・
ズドーン！！
艦魂連合＜出番を取るなボケ！
大野＜ご意見ご感想お待ちしております。

**１９４５．４．５～１９４５．４．７**

１９４５年４月５日　日本近海　戦艦長門艦橋

１６．５ノットの速度で進んでいた長門たちは、呉まであと少しの所に進んでいた。

「艦長。一号海防艦から入電。我先導スル。とのことです」

と通信員が伝える。

「やっと着いたか・・・全く。長門は幸運艦だな。だがまだまだ油断は禁物だ。いつ潜水艦が呉に来てもおかしくないからな・・・」

と艦長が答える。

「呉か・・・久し振りだな。野上とかあいつらは元気かな・・・」

大野が呟く。

「会えないよ？補給したら直行だし・・・」

長門が言う。

「じゃあ、会いたいなら生きて帰れってことか・・・燃えてくるな・・・」

「転移すれば・・・あっ！」

長門、何かに気付く。

大野、ニヤニヤしながら言う。

「呉に着いたら転移・・・」

バコッ！

「嫌だ」
長門断る。そして殴る。
「左舷から雷跡２！」
突然の報告。
「回避できるか？」
艦長が尋ねる。
「やれます。ですがもし回避すると・・・」
「海防艦が犠牲に・・・か。だが仕方が無い！これで食らったら作戦に支障が出る！回避だ！」
「はい！面舵一杯！」
魚雷をかわす。だがその先には海防艦が。爆発音。煙。
煙が晴れた時、海防艦鵜来の姿は無かった。

長門は泣いていた。
自分で仲間の命を奪った。自分が代わりに受ければよかった。
「・・・大野の・・・馬鹿！」
大野は俯く事しか出来なかった。

１９４５年４月５日　午後７時半　沖縄近海　第５８任務部隊旗艦
戦艦ニューメキシコＣＩＣ

「潜水艦から入電です。呉近海にて長門を含む７艦の艦隊に遭遇。魚雷を発射するも長門には命中せず、海防艦に命中。艦隊は呉に向かう模様。」

「ということは大和と長門が出てくるか・・・。呉には空母も居る・・・」
スプルーアンスが言う。
「空母が出てきても艦載機を七面鳥打ちにすれば問題はありません。それに、我々にはカミカゼで3艦も沈んだとはいえ8艦も空母が居ますし、戦艦にはほとんど被害がありません。」
ムーア参謀長が言う。
「やつらの事だ。カミカゼもやって来るぞ。そこに艦隊が突っ込んでくる。どうも嫌な予感が拭い切れなくてな・・・」
不安そうに言うスプルーアンス。

「司令。今日ぐらいは・・・」
参謀長が聞く。参謀長の頭の中はどのようにしてスプルーアンスを寝させない事かで一杯だった。
「貫徹でもしてカミカゼにあったら大変だ。私はそろそろ寝るとしよう。」
「全く・・・司令は・・・」
影から呟くニューメキシコ。

1945年4月7日

「この日、作戦が発表された。海上特別攻撃隊という名が出た時、乗組員は唖然とした。
大和では士官が中心の特攻派と若者が中心の特攻反対派で大衝突があった。そして口論から殴り合いに発展した。だが臼淵大尉の発言で全てが収まった。
『進歩のない者は決して勝たない。負けて目覚めることが最上の道だ。日本は進歩ということを軽んじ過ぎた。私的な潔癖や徳義にこ

だわって、真の進歩を忘れていた。敗れて目覚める。それ以外にどうして日本が救われるか。今目覚めずしていつ救われるか。俺たちはその先導になるのだ。日本の新生に先駆けて散る、まさに本望じゃないか。』と。

その話が終わった時、皆が涙していた。

そして大和以下３７艦の海上艦艇と、１４艦の潜水艦は沖縄を救うべく、呉から出港した。」

第二海上特別攻撃隊　司令長官　伊藤　整一中将

旗艦　大和

戦艦　大和　長門　榛名

巡洋艦　羽黒　高雄　利根

駆逐艦　波風、響、春風、初霜　雪風　磯風　朝霜　宵月

第四海上特別攻撃隊（囮艦隊）司令長官　木村　昌福少将

旗艦　足柄

巡洋艦　足柄　矢矧

駆逐艦　冬月　夕風　汐風　潮　霞　涼月　神風　浜風

第五海上特別攻撃隊　司令長官　小澤　治三郎中将

旗艦　天城

航空母艦　天城　葛城　隼鷹

戦艦　伊勢　日向

巡洋艦　青葉　酒匂

駆逐艦　杉　桐　春月　花月　槇　竹

潜水艦隊　司令長官　山崎　重暉中将

旗艦伊４００

伊３６　伊４４　伊４７　伊５３　伊５６　伊５８　伊１６５　伊２０１

伊202

伊361

伊372

伊400

伊401

## １９４５．４．５～１９４５．４．７（後書き）

作者＜投稿が遅れました。

大和＜調子に乗るからです。

作者＜一部内容は拝借させていただきました。それと残念なお知らせです。

長門＜馬鹿作者が・・・左手負傷。要するにつき指。

作者＜これを書いている時も左手の痛みと闘いながら書いています。燃える○ンポコリンフル稼働です。そして筋肉痛は鬼畜です。ですがやめるつもりはありませんのでご安心を。

榛名＜いつもこんな作者の駄文を見てくださりありがとうございます。

伊勢＆日向＜ご意見、ご感想お待ちしております。

## １９４５．４．７

１９４５年４月７日　午後５時　沖縄近海　第５８任務部隊旗艦
戦艦ニューメキシコＣＩＣ

「呉の近海を偵察していた潜水艦から入電です。大和を含む艦隊が出撃した模様。とのことです。また、現在海防艦数隻と戦闘中とのことです。大和の出撃は、呉の諜報員からも確認されています。」

「大和が出撃したか・・・思ったより早かったな・・・」

「はい。長官。さらに諜報部の情報では明日にジャップの航空隊の総攻撃があるとのことです。」

「各艦に打電。『明日航空隊の総攻撃と艦隊の特攻が行われる模様。カミカゼに備えよ。』とな。」

ニューメキシコはその時スプルーアンスが漏らした小さな呟きを聞いた。

「セイイチ・・・お前とは闘いたくなかったよ・・・」

（セイイチって・・・日本の・・・）

１９４５年４月７日　午後５時半　豊後水道　第二海上特別攻撃隊
旗艦　戦艦大和艦橋

「伊藤長官。我々は敵潜水艦に発見されました。海防艦により撃沈されましたが・・・」

「そうか・・・森下参謀長。ならば偽装進路などとってももはや何の意味も持たない。真っ直ぐ行こう。有賀君。もしもの時はしっかり頼むよ。あとこの事を各艦に打電しておいてくれ。文面は『我艦隊敵ニ発見サレタ模様。我々ハコレヨリ沖縄ニ直行スル。』」

「はっ！」

「全く・・・あいつとは平和な時に会いたかったのにな・・・」

「長官・・・」

野上が尋ねる。

「レイの事か。心配するな。あいつも全力でやってくる。ならばこちらも全力で迎え撃てばいい。それに、君の操艦に大和の運命がかかっているのだからね。」

「安心しました。長官。いざとなったら私もお供しますよ。」

「いや、それはならんよ。君のような若い人間がここで死んでどうする。それにまだ死ぬと決まったわけじゃない。勝てばいいのだよ。そんな悲観的になるな。それに、艦魂にもよろしく頼むよ。」

「はい。」

同日　戦艦長門艦内

全く・・・

そう思いながら大野は考え事をしている。

原因は無論。長門の事である。先日の海防艦の撃沈により再び心を

閉ざした長門はまた大野の部屋で泣いているというより引き篭もっている。

「長門、入るぞ。」

もちろん無言。

、

「落ち込むなよ・・・全く・・・そんな小さい事でクヨクヨするなよ・・・」

「・・・違う・・・私が迷ってるのはそんな事じゃない・・・海防艦に・・・『戦艦なんて役立たずだ。そんなもの作ってる暇があるなら航空機を作れ。そっちのほうが何倍も役に立つ』って・・・」

確かにそれはそうだろう。今の時代に、航空機で戦艦を沈めることができる時代に、戦艦なんて不要だろう。長門が続ける。

「私は・・・何も出来ないの？・・・あの人に言われたとおりだよ・・・私は何も出来ない・・・私なんかより航空母艦の子や航空機が役に立つ・・・悔しいよ・・・」

「俺は・・・思うんだよ・・・この世の中に役に立たない奴なんていない。

今役に立たなくても、いつか役に立てる。・・・だから、自分は役に立たないって思ったら終わりだよ。・・・それに、その答えは自分で見つけるしかないんだよ。」

「・・・私にも・・・私にも・・・見つかるのかな・・・」

「・・・きっとな。」

長門は泣いていた。この戦い・・・生きて帰らないとな・・・こいつと一緒に。

同日　午後7時　沖縄近海　第５８任務部隊第４任務群旗艦　航空母艦エンタープライズ

嫌な夢を見た。
ヨーク姉さんが、ホーネットが、ワスプが、皆ジャップに殺される夢。
私は何も出来ずに、何も手を出せずにただ見てことしかできない。
この夢はもう何回も見たような気がする。
私は最近、妹たちから慕われている。あなた達の仇も討った。
ねえ、私は・・・強くなれているのかな・・・

「姉さん？」
そう考え事をしていると、後ろから聞きなれた声がする。

「ヨーク？何の用？」
ヨークはこっちに走ってきて、抱きつく。

「全く・・・ヨークも甘えん坊だね・・・」
昔この子が生まれた時には、『ヨークタウン』の名はヨーク姉さんだけだと思って、冷たくしていた。その代わりだろうか？最近、ヨークに対してすごく甘いような気がする。

「ってこんな事してる場合じゃ・・・明日・・・カミカゼと「ヤマト」が突っ込んで来るって・・・」
カミカゼ・・・あの外道は・・・明日また突っ込んでくるのか・・・
イントレビットの命を奪い、みんなを恐怖させ・・・そしてヤマト・

・・私たちが討ってやる。ヨーク姉さんや、ホーネットの命を奪った憎いあいつを・・・

「姉さん・・・顔怖いです・・・」

「え・・・ゴ・・・ゴメン・・・」

どうやらいつの間にか怖い顔になってしまったようだ。ヨークに怖い思いをさせてしまったから少し申し訳ない。
でも、この子達は・・・ヨークやホーネットやエセックス達は・・・
私が守る。
ジャップのいい様になんかさせない。
まあ、私も、甘えてみようかな・・・
「ヨーク・・・寝させて・・・」

## １９４５．４．７（後書き）

作者＜５時間で突貫しました。えっと・・・長門さん出番多すぎ・・・いつのまにか大野とのコンビでお気に入りになってます。結構長くなってしまったような気がします。

長門＜・・・出番多すぎで・・・悪かったの？

大和＜悪くは無いと思いますけど・・・

ドダドダッ！

作者＜この音は・・・

エンタープライズ＜糞ジャップ共！私達も混ぜなさい！

ヨークタウン＜邪魔だ邪魔・・・え？

ズドーン！！

榛名、足柄、羽黒＜アメ公は黙っていろ

作者＜これはちょっと・・・

榛名、足柄、羽黒＜あんたも食らう？

作者＜え・・・ちょっ

ズドーン！

矢矧くなんか本編で出てないキャラが出てますが気にしないで下さい。

ご意見、ご感想お待ちしています。

## １９４５．４．７　？

１９４５年４月７日　午後８時３０分　日本近海　第五海上特別攻撃隊旗艦　航空母艦　天城

波の音とスクリューの音が聞こえる。
誰もいない航空甲板の後部。
私は一人でここにいる。
私が生まれた時には、すでに日本は負け続けていたという。
私は外に出ることは無かった。出撃できなかった。
耳に入ってくるのは、妹の声と嫌な知らせ。

もう、日本にはまともに出撃する燃料も、修理する資材も無くなっている。
だから、ここで負けたら・・・いや勝ってももう日本は勝てないのかもしれない。

「姉さん、何浮かない顔してるの？」
聞きなれた声。

「葛城。何でまたここに来るの。」

「姉さんこそまたここにいるじゃない。お気に入りなの？」

「いいじゃない何処に居たって。で何の用？」

「死ぬ前に姉さんの顔眺めていようと思って。」

「縁起でもない事言わない。というかそういうときでも冗談言える

あんたの能天気さって・・・」

「隼鷹さんが言ってた。別れは済ませとけって・・・」

「はぁ・・・確かに米軍は強いけど・・・そこまでする物なのかな？」

「まあでも・・・生きて帰りたいね。」

「そうだね・・・」

同日　第四海上特別攻撃隊旗艦　巡洋艦足柄

豊後水道を抜けたようだ。

「全く・・・こんな作戦に囮役で投入なんてなぁ・・・ハハハ・・・」

第四海上特別攻撃隊司令の木村　昌福司令が笑う。

「今度の作戦は簡単に言えば『死んで来い』ですからね・・・」

「まあ落ち込むな。いざとなったら撤退すればいいさ。」

「司令はいつもそうやって・・・その性格どうにかなりませんか？」

「明日死ぬかもしれないときにこれから性格を直せとはなぁ・・・」

「はぁ・・・」

全く。いつもこうだ。最初のころはこんな人に司令が勤まるのかと思ったが、
実戦の時には頼りになり、助かっている。

「足柄さん！助けてください！」

何処からか誰かが走ってきたと思ったら、矢矧だった。
矢矧に突然抱きつかれ、慌てる私。

「ちょっと！やめなさい！」

「見つけた・・・」

その声は、霞だった。

「何二人共？何かあったの？」

霞も走ってきて矢矧に抱きつく。

「えっと・・・一人ぼーっとしていたら霞に追われて・・・」

「霞は何が？」

「・・・私の矢矧ちゃんの仲を邪魔する人は・・・例え司令でも・・・」

そういうわけか・・・って明らかに危ないぞ私・・・

「はいはい・・・やるのは呉に帰ってからにしなさい・・・」

「・・・呉に帰って来れないかも知れないからこうしてるのに・・・ねえ矢矧ちゃん・・・」

「・・・」

黙り込む矢矧。

「ほれほれ・・・そこまでにしないか。いまだってアメさんに追跡されてるのかもしれないんだぞ？」

「そう・・・ですよね・・・」

司令に言われ、落ち込む霞。

「大丈夫だよ・・・多分・・・」

そう言って霞の頭を撫でてあげる矢矧。
優しいからかなぁ・・・好かれてる理由って。

その時。どこからか聞こえる大きな爆発音。

「！！」

私の目線の先には、被雷して炎上する駆逐艦の姿。
そして私の後ろには、血で染まった床と、血を吐いて倒れた霞の姿があった。

泣き叫ぶ矢矧。

それからの事を、私は、まるで遠くの風景を見るように見つめていた。

## １９４５．４．７　？（後書き）

投稿がかなり遅めになってしまい、本当に申し訳ないです。
そして、中途半端な閑話を掲載してしまい、本当に申し訳ございません。
あの後、『そういう物は経過を書ききってから行うもので、読者に対してフェアとは言えないし、失望させる元となる』という読者の方からのご指摘があり、やってしまったと深く反省しています。
ご指摘を受けた閑話については、削除を致しました。
これからは、読者の皆様を失望させることが無いように頑張って行きたいと思います。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9834x/

日本再興

2011年11月24日02時48分発行